

ラオス、チャンパサック地域の人々の資源獲得パターン

ーキャッチメント分析の試みー

西村 正雄

序

本研究は、私が1996年以来ラオス人民民主共和国チャンパサック県において、世界遺産登録にともなう調査研究の一環として行なわれたものである（図1）。この研究の大きな目的は、すでに世界遺産条約の制定（1972年）当初から述べられてきたものの、当初それほど注目されてこなかった問題点：遺産を維持管理してゆく主体は一体誰であるのかという点に関するものである。この重要な問題は、全く無視されてきたわけではなかったが、ユネスコ自身も含めてそれほど人々の議論の対象とはなっていない。なぜなら、当初、遺跡の保存の問題は専ら建築学、地質学、考古学等の分野に限られ、それぞれの専門分野からの技術的問題に集中してきたからである（西村2006c）。

確かに世界遺産条約がユネスコによって制定された当初、概念としては明確に文章化されてきたわけではなく、また実際の遺産登録にあたって、地元の人々重視を第一義的に考えてきたわけでもなかった。ユネスコが実際に公式に地元の人々第一に政策を実行するようになったのは、実に1990年代になってからのことであった。従ってユネスコでさえ、当初から概念として持っていたものの、実際に遺産と地元の人々との関わりを最重要課題としてその政策に反映させてくるのは、遺産制定から20年以上経ってからのことであったように思われる（西村2006c）。

今日、「維持可能な発展」が開発の分野で言われる時、世界遺産というきわめてインパクトの強いプロジェクトの施行にともなって、ユネスコはもちろん、世界遺産を維持管理する責任を負っているそれぞれの国、地方の政府は、維持管理の主体の問題を真剣に考えざるを得ない状況となっている。「維持可能」と述べる時、何を維持するのかという問題を問いかけることが重要になっている。



図1 チャンパサック平野、調査地域 (Source: Service Geographique d'Etat 1987: D-48-44)

本研究の調査地域である、ラオス人民民主共和国南部のチャンパサック県に位置するワット・プー遺跡と古代都市遺跡を中心とする世界遺産⁽¹⁾についても、遺産の維持管理を行う主体は誰なのかという点で繰り返し会議がもたれ、またディスカッションが行なわれた。この中で、この世界遺産の登録地域が、400 km²にわたること、そこに住む人々が5万人以上に

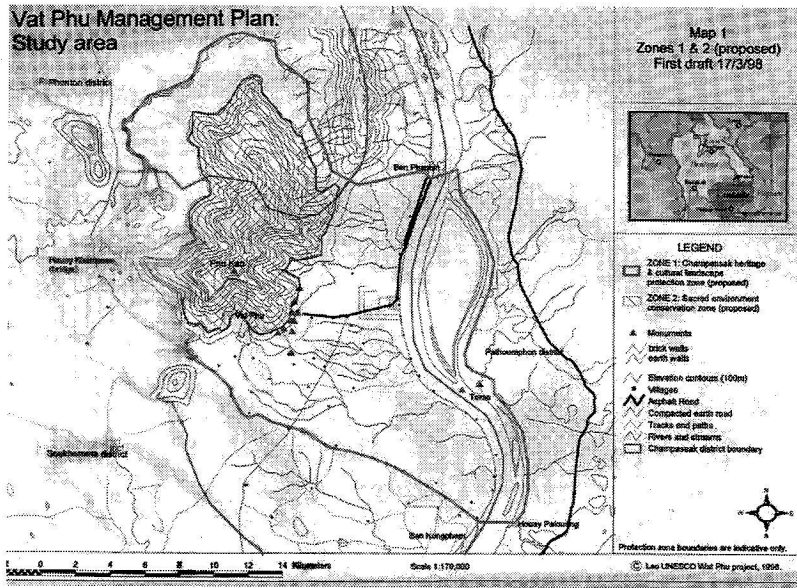


図2 チャンパサック平野と世界遺産地域

(Source: Government of Lao PDR and UNESCO 2001)

なることが強調された。これに関連して世界遺産登録前の調査で最も重要な点が、住民主体とは何かを追求することであった。このようにここでは、当初から住民の文化の研究の重要性が認識されてきた(図2)。

後に述べるように、この点で調査の中心として重要視したのが、人々の生活のパターンを調べることであった。世界遺産登録にあたって、遺産の維持管理をする彼らの生活パターンの持続的維持こそ、最も重要であり、その維持なくして遺産の管理は意味のないものになると考えたからである。すなわち、そこの住民が毎日の生活の中で、遺産とどのように関わり、認識しているのか知ることこそ、世界遺産登録に際して設定されるマスタープランにとって最も重要な点であった。

この調査は遺産登録後も続行されて現在に至っている。その過程で多くの点が判明してきているが、本論文では、この中でも、地元の住民と自然環境との関わりに焦点をあてて論じる。すなわち、チャンパサックの住民の日常生活に欠かせない資源獲得のやり方を探求する。調査は世界遺産内52村落を中心としている。調査地域内の住民の約90%は、農民である(小田島2005)。この地域の農民は自らの資源を自ら獲得する形で生活を営んできた。私の調査では、村ごとにこの資源獲得のやり方に大きな多様性が見られる事が分っている。それは、村落の立地が大いに関係していることも判明してきた。例えば、ある村落はカオ山を中心とする山塊に近いが、その代りメコン川から遠くなる。そういう村では、山の資源を大いに活用している様子が見られる。一方メコン川に近い村落の住民は、多く船を持ち、それをもって自ら川からの資源を獲得すると同時に、それを使って対岸の村と交流し、さらには対岸にある都市バクセのマーケットにアクセスするという点が見られる。

このように、村落の立地によって、資源獲得のやり方に多様性が見られることは調査を通して認識されてきた。

そこで本論文の目的は、そうした多様性の中に見られるパターンを明らかにすることであり、そのパターンを形成する要因を考察することにある。

I. 理論的枠組み

私はラオス、チャンパサックの文化的研究の中で、地域全体を包括する総合的アプローチの重要性を認識してきた（西村 2004b、c、2005a、b）。それは、東南アジア全般にわたる文化人類学的研究として、ある一つの村、一つのグループの綿密な民族誌は良く出されてきた。しかしこのため、人々があたかもその場に固定され、ほとんど動かず、他の人々とのインターアクションがないかのごとき印象を与えてきたのも事実である。近年、各地で文化の概念の再検討の中で、この問題が指摘されてきた。ラオス南部の研究の中でも、小田島は、研究の方法論の再検討の中で、従来の研究があまりにもまず村、グループといった単位を設定して行なわれてきたことに疑問を呈している（小田島 2004、2005）。

チャンパサックの村人は村を離れ、離れた場でまた文化の継続を行っており、さらに他の村からの婚入、仕事の出稼ぎ、また滞在を行なってきた。さらに近年、外国からの移民も見られる。こうした中で、私たちはチャンパサックの人々の行動を知る新たな理論的枠組みが必要であると考えてきた（西村 2007a、b）。

この理論的枠組みとして、カルチュラル・ランドスケープの概念導入してきた（西村 2004c）。カルチュラル・ランドスケープは、近年文化人類学の中で中心的テーマの一つとして注目されてきた。それは文化に伴う空間の問題と関係しながら、文化の研究に基礎的な記憶の問題とも結びつき、私の研究の中心である遺産の問題と密接に結びついてくるテーマである。

現在、人類学において、ランドスケープ研究は、二つの点で注目されている（Hirsch 1995）。

1. 人類学者が自身の研究がなぜそこに集中するのか、またそこに関わるのか理由を示し、研究の目的を明確にする外枠として、利用されている。すなわち、特定の人々のランドスケープを考える理由を示す目的として使われている。
2. その土地の人々によって、彼らの文化的、また自然の取り巻きに対して帰された意味づけについての叙述の方法として、利用されている。

まず第一の点で、ランドスケープ研究は、今日人類学者が直面している、研究対象〔研究される人々〕と自己〔研究する人々〕との関係といった、民族誌を書く根本的な問題に伴う、方法論の点で、一つの見方を提示することができると考えられる。すなわち、人類学的研究は、人間が人間の研究をするものであり、究極的に完全な客観的立場には立つことができないことは明白である。し

かし同時に、主観の範囲、主観の「主旨」：どうして、どこに、どのように、なぜ主観的なものが研究に入ってくるのか、個々の事例の中に示しておく必要がある。これがなによりも、研究された人々に対して、そして他の研究者をはじめとする民族誌を読む側にとって、最も誠実な態度であると考えられるからである。この点で、ランドスケープが、もともと画家の技術用語として発達してきたことが大きな意味を持つ。絵を描くものにとって、絵の中心モチーフをその絵を見る者に示すことで、画家がなぜ風景を切り取って絵としたのか、説得しているのであり、見る者は、たとえそれが画家の目を通した風景であっても理解するのである。この絵を描く者と描かれるもの、そしてその絵を見る者の関係が、まさに私たち人類学の中で問われている関係であり、その意味で、絵という額縁に収められた風景、ランドスケープの概念が、人類学研究の方法論として有効であると考えたのである。

さらに、文化人類学的研究の重要な点であるホリスティックな視点を、ランドスケープは持ち得る。今日、「文化」という言葉が、あまりにも定義が不明確なまま使われてきたため、それに代わる概念の模索がなされている。すなわち、描写する人々の暮らし、行動する次元 (plane) をどのような言葉で表現するか、模索が行なわれている。この点で、ランドスケープという概念は、時間、空間を区切った中での総体的なものを意味し、ホリスティックな視点を包含し、文化に代わり得る概念として考えられる。

第二に、今日の文化人類学におけるランドスケープ研究のもうひとつの目的は、その土地の人々のランドスケープ観を知ることである。すなわち、そこの人々がどのように、ランドスケープを認識し、それに意味を与えているのか知ることである。ランドスケープが文化的事象ばかりでなく、自然環境をも含む概念であるため、カルチュラル・ランドスケープの多くの研究が、人々と自然との関わりと、そこから生まれる自然観の研究になっているのは当然のことである (例、Abramson and Theodossopoulos eds. 2000; Ucko and Layton eds. 1999)。カルチュラル・ランドスケープに関するこうした研究の中で、自然対文化の考え方の再考がなされなくてはならないことが明らかとなっている。すなわち、多くの研究が、文化と自然の境界が明確なものではなく、むしろ文化と自然とが一体であり、その中で空間的、及び時間的な境界さえも不明確になると、人々が考えていることを示している (Abramson and Theodossopoulos eds. 2000)。ランドスケープは、空間的、時間的次元を超えたものとして認識される傾向があるようである (Ucko and Layton eds. 1999)。

本研究において、物理的空間としてのランドスケープに焦点をあてる。すなわち、その空間を構成する一部としての人びとが他の要素とどのようにインターアクションを起こしてランドスケープをつくり上げているのか、その結果の解明もまた、ランドスケープ研究の基礎であるからである。そこで、本論文では、村の人々の資源獲得のやり方に、パターンが見られるのかどうかの検証を目的として、フィールドワークのデータを整理して述べてみたい。

II. 方法論的考察－キャッチメント分析について

キャッチメント分析は、元々1970年代に考古学の分野で開発された研究方法である。最初にそれを提唱し、実際にイスラエルのカルメル山の遺跡の分析において使用したのが、ヴィタ＝フィンツイ (Vita-Finzi) とヒッグス (Higgs) であった (Vita-Finzi and Higgs 1970)。ここで、彼らは遺跡に暮らした住民が、どのくらいの範囲から生活に必要な資源を獲得したのか研究した。この研究で彼らが考えた方法が、キャッチメント分析と呼ばれる方法であった。ここで彼らは、地図上で遺跡を中心として、遺跡から出土する遺物がどのくらい離れた所で獲得され、遺跡に持ち込まれて、それを原料として道具を製作し、使用し、破棄されたのか調査した。すなわち、当時の人々がどのくらいの範囲の環境を開拓したのかについて調査したのである。その結果、それまで人々が考えていたよりもはるかに広範な地域で資源獲得活動が行なわれ、遠方から持ち込まれた資源がカルメル山の人々の生活を維持したことを明確にしたのであった。

その後、この方法は、遺跡の立地、そこに住んだ人々の活動範囲を調べる考古学者によって応用されてきた。しかし、それを批判的に利用し、それを基に新たなキャッチメント分析を編み出したのが、ミシガン大学の人類学的考古学のグループであった (Flannery ed. 1976)。フラネリー (Flannery) を中心とするグループは、遺跡からの距離よりも、遺跡から1km、2km、3km、4km、5km、そして10kmまでの圏内でどのような生態系が存在しているのか調べた。すなわち、その生態系の利用の仕方が、それぞれの遺跡の特性につながると考えたのである (Flannery 1976:103-117) (図3)。

III. チャンパサックの自然地理的・歴史的状況

A. チャンパサックの地理的背景

チャンパサック世界遺産は、正式名称は、「チャンパサックの文化的景観の中にあるワット・プー及び関連古代集落群」⁽¹⁾ である。しかし本論文では、略して「チャンパサック世界遺産」という名称で呼ぶ。チャンパサック世界遺産が存在するチャンパサック郡は、ラオス南部のメコン川沿いに位置しており、首都のヴィエンチャンから東南方向に約500km、最も近い都市、チャンパサック県の首都、パクセ⁽²⁾ の南約30kmのところに位置している (西村2006a)。

ラオスは四方を他国に囲まれた国であり、海に面し

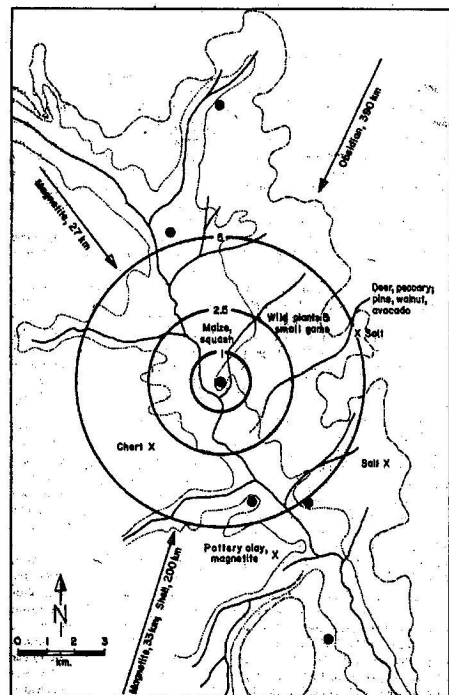


図3 メキシコ、オハカ溪谷のキャッチメント
(Source: Flannery 1976: 108)

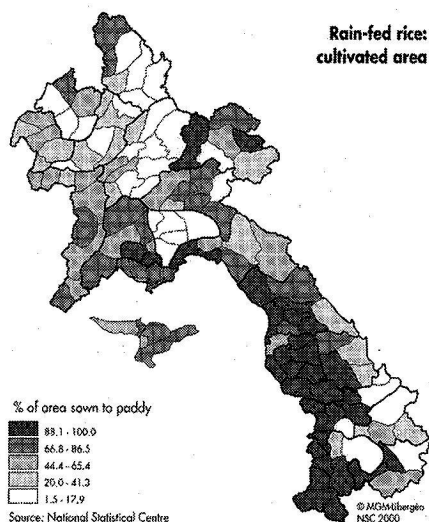


図4 雨水による水稻耕作地域 (Source: Sisouphanthong and Taillard 2000: 78)

く (Sayavongkhamdy 1990)、きわめて良好な保存状態のまま保ち続けた要因ともなっているといえる。カンボジアとの国境地帯のチャンパサック県南部は、メコン川が断層を流れるため、流れの急な滝となっており、今日コーン滝、また拡大したメコン川内に多くの岩礁、小島があり、フォーサウザンド・アイランズと呼ばれ、風光明媚な観光地となってきた (図2)。

この川と山に囲まれた土地は、タイとの国境を作る山塊の裾野が広がってメコン川にいたるまでの、海拔約100mからそれ以下の狭い沖積平野でできている (図1)。沖積平野は、山塊からメコン川に流れ込む小河川が東西に流れている。これらの小河川は、乾季 (12月から4月) には、ほとんど降雨がないため干上がる。一方雨季 (5月から11月) には洪水を起こす。この規則的な洪水は、平野部に泥土の堆積をもたらし、比較的肥沃な土壌の分布を平野一帯にもたらししてきた。特に、山沿いでは良好な土壌と雨水により、雨水頼りの水稻耕作を可能にしてきた (図4)。ラオス全土が比較的土壌の質の点で恵まれない中、この地はその中では、比較的水稻耕作ができる土地として知られてきたのは、この定期的な洪水のためであった。乾季にはほとんど雨が降らず、一方雨季には多大の降雨によって洪水をもたらし気候条件は、そのサイクルとそれをいかにコントロールするかが、そこでの農耕民にとって最も重要な課題であった (図4)。

最近の研究によれば、歴史的にも、この地における洪水はそれを排水する高度な技術と知識が必要であり、この地に都市を築いた人々は、そのための技術と知識を持ち合わせていた様子が見える (Cucarzi *et al.* 1992; Pichard 1997)。アンコールのあるシエムリアップは歴代の王の仕事として、網の目のような灌漑水路が建設されたが、その大きな目的は、水の供給にあった (Groslier 1979; Rooney 1994)。一方、この場所でもまた、灌漑水路の建設の痕跡があるが、それは排水を目的としたものであったと思われる (Cucarzi *et al.* 1992)。この排水こそ、この地の人々の知識と技術が結集

ていない。このうち、隣国のタイとの国境は、同じく隣国ベトナムとの国境と並んで長い国境線を共有する。タイとの国境のほとんどは、メコン川によって形成されている。しかし、この世界遺産が位置するチャンパサック県は、その県内をメコン川が流れ、タイとの国境線は山塊によって形成されている。その結果、特にチャンパサック郡は、その山塊とメコン川に囲まれた一種孤立した土地となっており、そこにアクセスするにあたって従来メコン川を渡るか、タイ側から山塊の裾野をめぐる道路をたどる必要があり、交通の便の点で一種「不便」な所であった (図1) (西村2006a)。しかしながら、この不便さがこの地域の遺産をそれが造られ、そして廃棄されて後もほとんど大きな攪乱もな

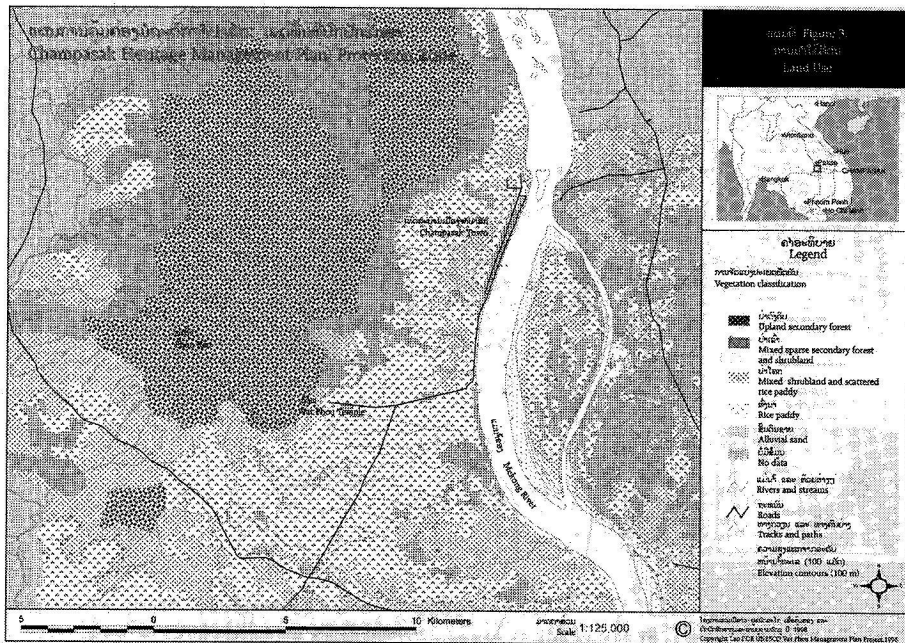


図5 チャンパサック平野と山塊の自然環境 (Source: Government of Lao PDR and UNESCO 2001)

したものと考えられる (図5) (西村2006a)。

チャンパサック平野の西に存在する山塊のうち最も高い山が、標高1416mのカオ山 (Phu Kao) である (図1)。カオ山は、チャンパサック平野のどの位置からも見ることができると同時に、メコン川からもよく見ることができる。この山は、独特の形をしていることで知られている。その山頂に岩が屹立しており、遠望では、まるで自然のリンガ⁽³⁾ がそこにあるように見える。そのため、それを頂に持つ山全体が神の宿る山として見られ、これがカオ山を聖地として信仰する理由となったと考えられている (Barth 1902)。実際、シェスタプラ古代都市で発見された碑文によれば、「男がリンガバルバタ (Linga Barbata) (カオ山のこと) に導かれて都市 (シェスタプラ) を造った」と述べている (Jacques 1962, 1986; Cucarzi and Zolese 1997; Jacques 1962, 1986; Jacob 1974; Lintingre 1974)。カオ山の存在こそ、この地域に人々が集まり、都市を確立し、聖なる山に見守られて毎日の生活を確立し、聖なる山 (カオ山) への信仰のため、寺院 (ワット・プー) を建立したと考えられている (Barth 1902; Cucarzi and Zolese 1997; Dumarçay 1988; Finot 1902; Government of Lao PDR and UNESCO 2001; Jacob 1974; Jacques, 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura 1998c)。

B. チャンパサックにおける遺産の歴史的意義

このチャンパサック平野と山塊は、先アンコール時代 (ca 3-9C AD)、アンコール時代 (ca. 9-15C AD)、そして後アンコール時代 (ca 15-19C AD) の遺産を集中的に含む場所として知られている。特

に、先アンコール期からアンコール期につくられたワット・プー (Vat Phou) と呼ばれる石造寺院コンプレックス (Barth 1902; Dumarçay 1988; Finot 1902; Government of Lao PDR and UNESCO 2001; Jacob 1974; Jacques, 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura 1998c; Pichard 1997)、また、平野にはほぼ作られた時代そのままに埋蔵されている「古代都市」(シェスタプラ) と呼ばれる都市遺跡が存在している (図2) (Cucarzi *et al.* 1992; Government of Lao PDR and UNESCO 2001)。これらの遺跡は、ごく小規模な調査を除いてほとんど調査されずにそのまま残存してきた。

現在まで調査をしてきたフランス隊、イタリア隊によると、ワット・プーの周辺に残る石造建造物の痕跡は、ワット・プーとは異なった様式を示しており、その造り手は未だ不明である (Cucarzi and Zolese 1997; Lintingre 1974; Parmentier 1914)。ワット・プー寺院コンプレックスは、今日砂岩とラテライトのブロックで構築されているが、フランス隊の調査は、そうした石造の建物が造られる以前、レンガ造りの建物が存在し、さらにそれに先立って木製の建物の存在があったことを示唆している (Dagens 1988; Dumarçay 1988; Government of Lao PDR and UNESCO 2001)。このことは、ワット・プー寺院コンプレックス自体も、その最初の造り手は、アンコールを構築したクメール人とは異なる可能性があることを示唆している (Lintingre 1974)。時代的に、この寺院コンプレックスから出土する最古の遺物が、5世紀から7世紀と示唆されており、明らかにカンボジアのアンコールの国家形成以前にこの建物が建造され始めたことを示している (Jacob 1974; Jacques 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura 1997, 1998a)。

さらに、古代都市遺跡は、その中の建物の多くがレンガで造られていたことが知られている。一部土台石に砂岩が使用されたが、ほとんどがレンガで造られていたと思われる。その最下層のレンガの年代測定から、都市の形成の開始は5世紀ごろからそれ以前と推定されている (Cucarzi, *et al.* 1992; Nishimura 1997, 1998a; Nishimura and Sikhaxay 1998)。このことから、この地に人々が集まり、都市を形成し、また宗教寺院を建立し始めるのが、5世紀からそれ以前と推定されているのである。このことは、この地が、社会-経済的な意味で、また宗教-観念的な意味でアンコール時代に先立って重要な場所であったことを示している (Cucaruzi and Zolese 1997; Cucaruci, *et al.* 1992; Nishimura and Sikhaxay 1998; 大坪 2004)。

C. 文化遺産保護に関する活動

文化遺産の保護の活動は、ヨーロッパからの調査者がこの地を訪れて初めて始まったと考えられているが (例、Government of Lao PDR and UNESCO 2001)、私たちの調査では、そうではない (西村 2004c)。いわゆる科学的な保存修復の知識と技術は、ヨーロッパの学者が持ち込んだものであったが、遺産保護の活動は、調査以前からあったと考えられる。村の人々による日常的保存修復の活動が、調査以前から存在していた様子がうかがえる証拠がある。私たちの歴史的資料の調査で (西村 2004b, 2006a) ワットプーの建物の周辺は、明らかにきれいに整備されている様子がうかがえる

(Marchal 出版年不明)。この整備は、ヨーロッパからの人々の指示でおこなわれたのではなく、地元の人々自身の自発的意志によるものであったと考えられる (Levy 1959a)。今日でも地元の人々は、自らの意志で、ワット・プー周辺遺跡の整備を欠かしていない。これらの意志の源を探ることは、この地の人々による修復保存を考える上できわめて重要である。彼らは、彼らの考えから、修復保存の重要性を認識してきたのであり、そのやり方を発達させてきた (西村 2004b、2006a)。彼らの整備の特徴として、2つの点があげられる。

第一に、地元の人々は、ワット・プー内の参道、下段テラスから上段テラスへ至る道の整備を行ってきた。これは、上段に仏教寺院が当時存在しており、そこに至る道の整備が必要であったからと考えられる。

第二に、主要な遺跡、遺物に対し、崇拜の念を示すため、雑草を取り払い、周辺をきれいにし、花、ろうそく、線香を添えてきた。またいくつかの重要と思われる石像を人が容易に見やすい場所に集め、それらに花、ろうそく、線香をそえてきた。このやり方は現在でもワット・プー周辺で良く見られる光景である (西村 2006a)。

1980年代以来、こうした村人の整備とは別に、ヨーロッパからの修復プランが出始める。ワット・プーの修復に関心を持ってきたのは、フランスであった。フランスは、隣のアンコールで、早くから保存修復にたずさわり、クメール建築の保存修復に関しては、世界的に秀でた知識、技術を蓄積してきた (Rooney 1994)。この知識、技術の裏づけをもとに、ワット・プーの保存修復に関して、独自のチームを送り、プランを立ててきた (Dagens 1988; Dumarçay 1988)。

IV. チャンパサックのミクロ生態系

こうした遺産の点在するチャンパサック平原とその周辺の自然環境の調査は、ほとんどなされてこなかった。特に、チャンパサックのミクロなレベルでの生態系の詳細を知ることはそこに暮らす人々の遺産との関わりの中で重要であるが、まだ現在調査中であり、その全容の解明には、なお時間が必要である。しかし、大きな枠組みでのチャンパサックの生態系の問題については、ユネスコによって世界遺産登録のためのマスタープラン作成の一環として調査がなされてきた (図2、5)。

それによると、チャンパサックのミクロ生態系は、一般的にラオスの生態系とほとんど同じであるが、特にこの地が、メコン川とそこにすぐ迫って存在する山塊、そしてその山塊からメコン川に向かって流れ込む小河川が比較的多く、それらが一体となって、他の場所にまして小さな区域内での生態的多様性を示している (図1、5)。

この地域一帯の生態系の解明にはまだ綿密な調査が必要であるが、本論文の目的である人々の資源利用と関連した生態系に関しては、概要は分かっている。この地域の人々の活動を含めた生態系を考える上で重要な要素は、チャンパサックの人々のほとんどが、低地部農耕に従事していることである。そこで、私たちが行ってきたチャンパサックの農村の物質文化の調査から、農民が

自らの生活維持のため、一般的にどのような資源をどのように獲得してきたのかまとめると次のようになる。

<建築資源>

- 1) 木材：a. 山塊から自ら切り出し、製材するもの。
b. 木材業者が山から切り出し、製材したものを購入したもの。
c. 取り壊した家いからの古材を再利用したもの。
- 2) 竹材：自ら資源を切り出して、目的に合わせて加工する。
- 3) レンガ：地元のレンガ、または、輸入レンガ（ベトナム、中国、タイ製）をマーケットで購入。
- 4) 屋根材：a. トタン：今もっとも一般的な建材。すべてマーケットで購入。
b. 瓦：すべてマーケットで購入。
c. 草葺屋根：素材の草を自ら刈り取り、それを編んで屋根材にする。または、マーケットで出来上がったものを購入。

<食物資源>

1) 炭水化物、およびスパイス類

水稻、トウモロコシ、豆類、イモ類、トウガラシなど：自ら生産するか、近隣の農民との物々交換。

2) タンパク類

陸産肉類：豚、牛、鳥（ニワトリ、アヒル）、犬、ヘビなど：多くは、時々マーケットで購入。
ニワトリは多く自ら生産。

魚類：淡水魚：ほとんど、近隣の田、小川で獲得。

貝類：淡水産貝類：ほとんど、近隣の田、小川で獲得。

他の水性動物：カエルなど：自ら、田、小川で獲得。

植物性タンパク：豆類など：自ら生産する。

3) 野菜類

栽培種：トマト、ジャガイモ、レタス、キュウリ、ナス、インゲン、レンコンなど：ほとんど、自らの田のへり、または家の敷地内で栽培。

野生種：水生野菜、葉状野菜：村落周辺で採集。

<生活資源>

- 1) 土器等：マーケットで購入。または、チャンパサック郡の他の農民から現金購入、もしくは物々交換で獲得。
- 2) 鉄器類：自ら作成するもの（刃器類）か、またはマーケットで購入。
- 3) 木器類：多くは自ら作成する。木の材料は、山の森で自ら獲得。時に、メコン川の流木を利用。これらの物資のうち、マーケットで購入するものの比率が序々に高まってきているが、ここでは、



図6 チャンパサック平野の自然環境とキャッチメント領域 (Source: Service Geographique d'Etat 1987: D-48-44)

いまだに多くの物資が自ら得る自給自足的な様相を示していることがわかる。このことから、農民の生活維持にとって、この生活物資を得る場を維持し続けることが、チャンパサックの人々の生活維持にとって最も重要であることがわかる。生活の空間の調査が、チャンパサックの文化の動態の研究に欠かせないのである。そこで、彼らの自前の資源獲得行動に焦点をあて、どのような行動パターンが見られるのか調査した。

調査は、チャンパサック世界遺産内の村落で行なったが、400 km²に及ぶ地域で、ミクロなレベルでの環境が異なることから (図5、6)、そこでの資源獲得パターンは当然異なってくることが予想された。このため、

まず地域を基本的な四つの環境ゾーンに分けた。それらは、第1ゾーン：山麓地域；第2ゾーン：山塊に近いがフォレストラインの外側にある平野地域で、道路にアクセスしにくい地域；第3ゾーン：山塊に近いがフォレストラインの外側にある平野地域で、道路にアクセスしやすい地域；第4ゾーン：メコン川に沿った地域。この環境ゾーンの考え方は、基本的にユネスコのマスタープラン作成に当たって調査されたゾーンと一致している。しかし、それと異なる点は、私たちのマテリアル・センサス調査によって、近年マーケットへの依存度が増してきている点を考え、特に内陸部平野地域で、マーケットへ行くための道路へのアクセスの度合いを環境ゾーン設定の中で考慮しておいたことである (図6)。

こうして選んだミクロ環境ゾーンから、それぞれ一つのゾーンから一つサンプル村落を選び、そこでの村人へのインタビューと観察により、資源獲得パターンの調査を行なった。調査を行なった村落は次のとおりである：第1ゾーン：タテン・トゥーン村；第2ゾーン：サンケーン村；第3ゾーン：ノン・ノキエン村；第4ゾーン：パノンタイ村である。以下、それぞれの村における資源利用の状況について説明する。

V. チャンパサックの人々の資源獲得パターン：4つの村の分析

第1ゾーン：タテン・トゥーン村 (図7)

タテン・トゥーン村は、チャンパサックの西に存在する山塊に最も近い村である。実際にキャッチメント分析のため、村を中心に1km、2km、3km、4km、5km、そして10kmと同心円を地図上で描いたとき、5km圏でその30%以上が山岳部に入り、それ以外の平地部でも、森林、または草地、そして小川に覆われ、耕作可能な平地は、約20%以下となっている (図7)。小川も、石で覆われた状況を呈しており、その水を直接田に引き入れることはほとんどできない状態となっている。このため、



図7 第1ゾーン：タテン・トゥーン村のキャッチメント (Source: Service Geographique d'Etat 1987: D-48-44)

わずかに残った平地も、耕作が困難な不毛な土地となっている (図8a、b、c)。実際、この地のほとんどは、鉄分を多く含むラテライト質で、この点からも耕作に適していない。また、ラテライト系の土壌以外の場所では、シルト系の土壌となっており、雨季には侵食されて流れ、堆積しないという欠点をもっている。このため、ほとんど水田に向かない土地となっている (図8c)。

唯一水田耕作が極めて小規模に行なわれているのが、タテン川に沿った地域である。しかし、そこでも水田耕作は灌漑を基にしたものではなく、雨水頼りの耕作となっている。タテン川は、タテン・トゥーン村にとって生活に関する多くの資源を提供する重要な川である。飲料水ばかりでなく、そこで取れる水生のタンパク (魚貝類、カエルなど)、水生の植物、また川の土手に生える植物は、すべて食用として重要な資源となっている。タテン川は、雨季洪水を起こすという問題はあるが、チャンパサックを流れる他の多く小河川と異なり、乾季に干上がらないという利点がある (図8a)。このため、多くの住民は、タテン川の土手を利用して、野菜栽培をしており、川が村の住民の野菜の供給地とな

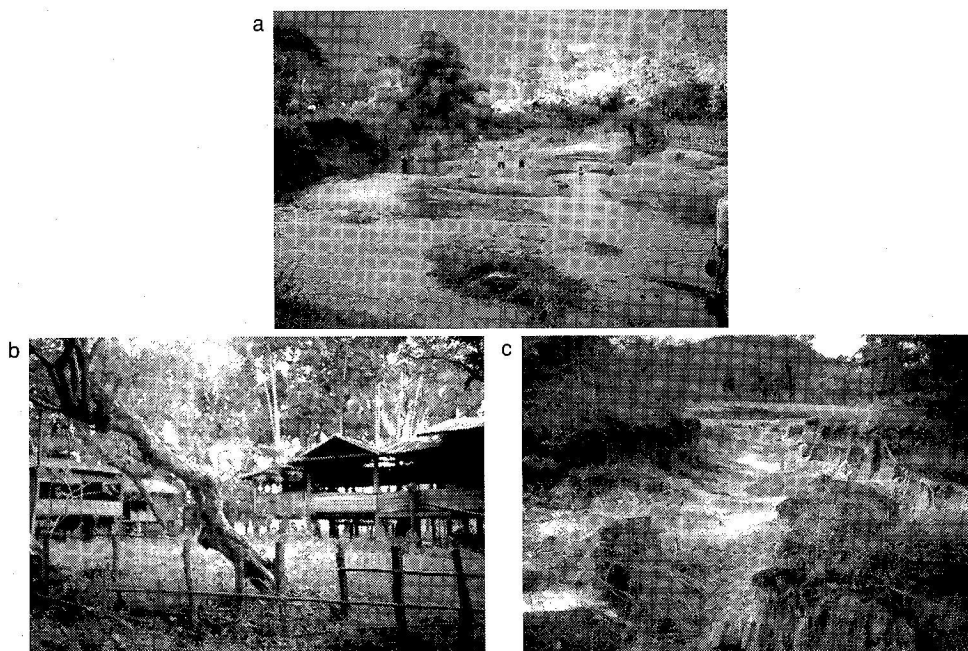


図8 タテン・トゥーン村の環境状況：a タテン川による資源採集；b タテン・トゥーン村と家の周りの資源；c 侵食のはげしいタテン・トゥーン周辺の土壌。(西村正雄撮影)

っている。

村は、メコン川から遠く（約15 km以上離れている）、チャンパサックの多くの他の村落の人々がタンパク源とするメコン川からの魚、貝類にほとんどアクセスできない。したがって、彼らのタンパク源は、自らタテン川を中心に獲得する資源でまかなわれてきた。

第2ゾーン：サンケー村（図9）

サンケー村は、タテン・トゥーン村と類似した立地にある。すなわちカオ山を中心とした山塊に近く、山の資源が獲得し得やすい位置にある。しかし、タテン・トゥーンとの違いもある。大きな違いは、タテン・トゥーン村周辺では、土壌の質と水利用の点から、水田耕作がほとんどなされていないのに比べ、サンケー村周辺では、水田が広がり、それにあわせて存在する森林からの資源とあわせて利用できる点である（図10a、b、c、d）。一般的に土壌は、雨季の定期的な洪水によってもたらされる比較的肥沃な土壌に覆われるため、主要作物である水稲耕作は良く行なわれている。

水稲耕作は、ほとんどが雨水頼りの農法であるが、ここでの農耕は、洪水をうまく利用するため、チャンパサック地方の気候：雨季と乾季の別が明確である、をよく認識したスケジュールにしている。雨季が5月頃から始まるため、4月頃からサンケー村の農民は苗床作りに忙しくなる。その間、雨が降り始め、土が軟らかくなり始めると、田の土をスキによっておこす作業が始まる。この田おこしは、水牛を利用したスキ耕で行なわれる。牛の糞はそのまま土に入れ込まれ、大切な肥料となる（図10a）。この作業は、村人の間の労働互換によって行なわれる場合が多い（例、小田島2004）。また、ここでは刈り取りが10月初旬に行なわれるが、その刈り取った後の稲わら、また脱穀後の粃殻を田に集め、焼く。これも、サンケー村では重要な肥料となっている。

サンケー村では、森林にも比較的容易にアクセスできる地理的位置にある（図9）ことを利用して、森で取れる資源を使つての手工芸も盛んである。一般的には、草葺屋根作り（図10a）や、村の女性のほとんど（一部男性も混じる）が行なっている、モチ米を入れるバスケット作り（図10c）などである。バスケットの材料薄く、細く裂いた竹であり、チャンパサック一帯で見られるものであるが、森、特に川のそばには多く生育している。また、木工細工、木材作り、金属器細工なども行なわれている。ここで作られた製品は、自ら使用するほかに、他村へ物々交換の形で流通してゆくものが多い。また近年（2002年頃）（2004年サンケー村でのインタビュー）から、仲買業者が農民の家を回り、製品を集めてマ

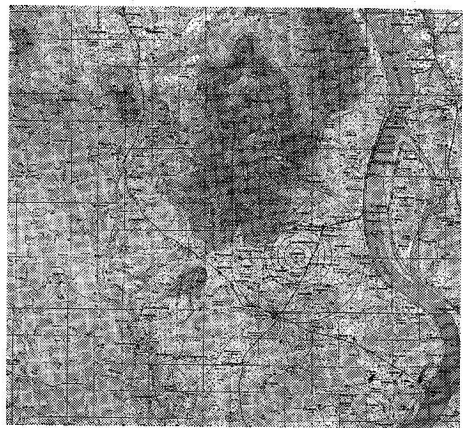


図9 第2ゾーン：サンケー村のキャッチメント (Source: Service Geographique d'Etat 1987: D-48-44)

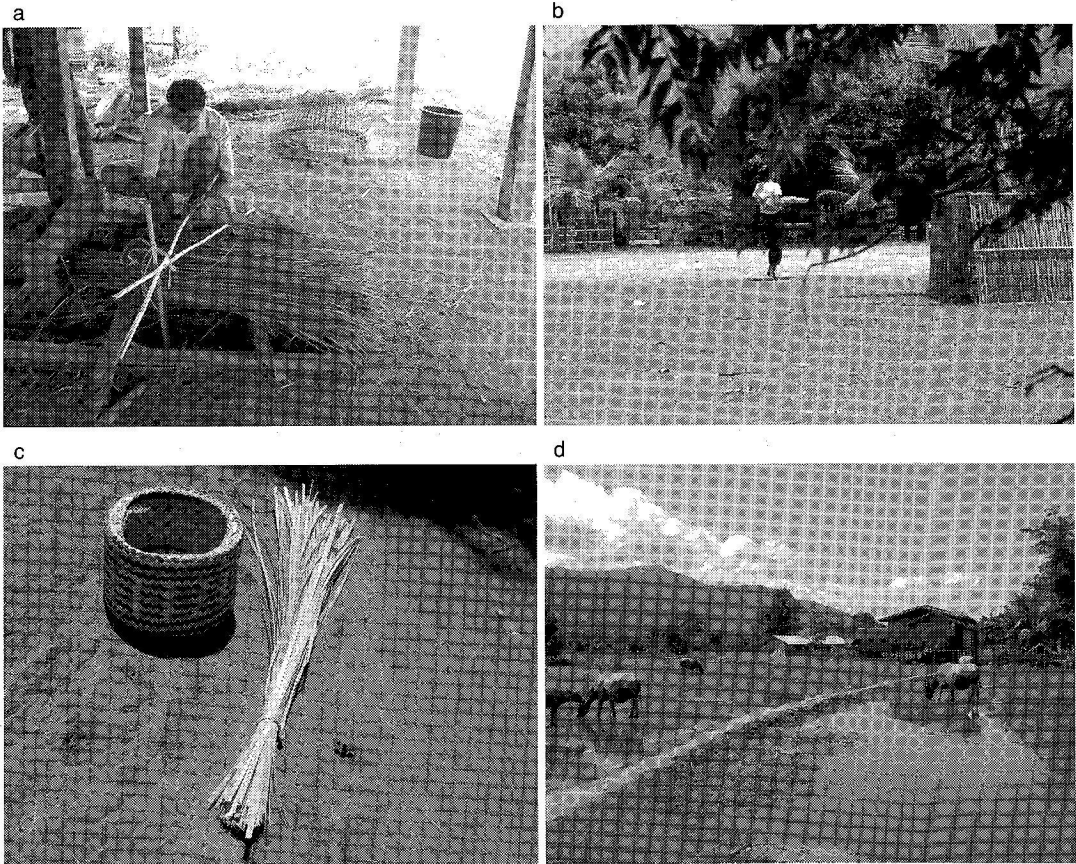


図10 サンケーン村の環境と手工芸：a 草ぶき屋根づくり；b サンケーン村の環境；c 村の附近でとれる竹をつかったモチ米を入れるカゴ；d 田植え直前の水田（5月）（西村正雄撮影）

ーケット（チャンパサック群のドンタラートばかりでなく、パクセ、またタイとの国境のチョン・メック）へ出荷している様子である（2004年、サンケーン村でのインタビュー）。サンケーン村では、2km圏で多彩な資源の利用が可能で（図9）、それをうまく利用した生活を営んできた様子がうかがえるのである。

第3ゾーン：ノン・ノキエン村（図11）

ノン・ノキエン村は、サンケーン村の近くに位置する（図11）。このため、ミクロの生態系はほとんどサンケーン村と類似している。しかしながら、サンケーン村との違いもある。2つの点で違いがある。第一に、サンケーンに比べ、小川からの距離が遠くなる。このため、雨水頼りの農耕を行なっているこの村では、サンケーンほど水の点で利便性がない。これが、この村の稲作の生産高に影響してくる。水田耕作に適さない土地の面積は、サンケーンに比べ大きくなる。サンケーン村がほぼ90%の利用率に比べ、ノン・ノキエン村では、70～80%になる（図11）。

第二の違いは、ノン・ノキエン村は、チャンパサック・タウンシップの中心部からワット・プー、そして枝分かれしてドンタラートに続く幹線道路に面しており、道路へのアクセスがサンケーン村に比べはるかに良いという点である（図11）。それは、チャンパサック郡で最も大きなローカル・マーケットであるドンタラートへ行く便が良いということを意味している。それが資源獲得のやり方に影響を与えている様子が見られる。私たちのマテリアル・センサスにおいて、その違いが明確に認識されている。そこで、この村をサンケーン村と比較することで、どのように資源獲得パターンに違いが見られるのか具体的な要因の分析が必要と考えた。



図11 第3ゾーン：ノン・ノキエン村のキャッチメント (Source: Service Geographique d'Etat 1987: D-48-44)

先に述べたようにノン・ノキエン村では、灌漑水路がなく、雨水頼りの農耕から、農耕生産からの利益が低い。このため、村民は多くの副業を行なっている。その多くは手工芸であるが、ここでは、草葺屋根作り、バスケット作り、竹細工、織物、薪作り、炭焼き、木材生産、金属加工など、広範囲にわたっている（図12a、b）。近年、これに加えて、炭焼きからの応用技術として、レンガ造りが盛んになりつつある。

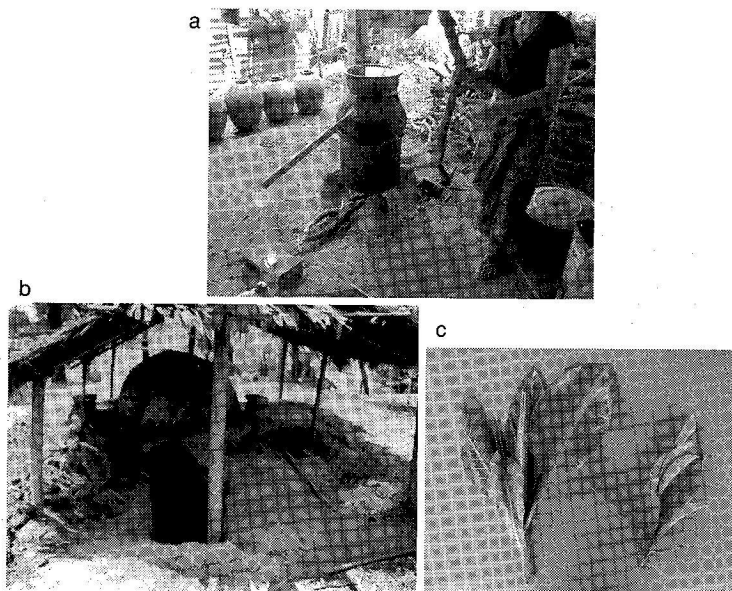


図12 ノン・ノキエン村の状況：a 地酒造り；b 炭焼き；c 野生の食用野菜（西村正雄撮影）

興味深いことに、村民はそうした手工芸品のほとんどをドンタラートのマーケットに出しており、アクセスの良さもまた、手工芸の発達に影響を及ぼしてきたものと思われる。さらに近隣の村人との直接取引も行なわれており、農耕生産以外の収入がこの村の人々にとって重要な要素となっている。このため、農家では多く複数の自転車、オートバイを有しており、それが交通、運搬の手段となっている。

分析から、この村を中心に5km圏に、カオ山塊の森林地帯を含んでおり、5km圏で森林の占める割合は約8%である(図11)。また、同じ約5km圏内で、メコン川に達する。このため、村の人々は、山と川からの多様な資源へのアクセスが可能となっている。これを反映して、村の手工芸のための原材料は山塊の森林地帯で得られており、それを加工している。同時に道路に面しているため、マーケットに製品を出す点で有利な状況にある。マーケットが近いため、手工芸が盛んになったわけではなく、他の場所に比べ農耕が困難な状況と、資源へのアクセスの利便さが、この地で手工芸を盛んにした理由と考えられるが、後の要素である道路、マーケットの発達という新しい環境への適応形態として、この村での人々のチャンパサックの自然環境および社会環境によく適応した生き方がうかがえる。

第4ゾーン：パノン・タイ村(図13)

上述の3つの村と比べ、パノン・タイ村は、メコン川に沿ったところに位置している(図13)。このため、この村の人々は、メコン川の資源を最大限利用した生活をしてきた。実際、私たちのマテリアル・センサスでも、漁業からの収入を生活の重要な糧としている世帯が全体の70%以上を占めている(図14)。彼らの多くはそれを専業としていなくても、農耕との兼業で行なっている(図14)。かれらの農耕地は、メコン川沿いとは限らず、そこから離れているところが多い。しかし、農耕地は、ほとんどすべて村から2km圏内に存在している(図13)。

また、メコン川の土手の斜面を利用して、野菜栽培を行なっている。これは、雨季の間、水につかるその部分は、乾季には肥沃な土壌を残して水が引くため、野菜畑として適しているからである。そこで栽培される野菜は、ナス、キュウリ、トマト、トウモロコシ、インゲンなどが多い。自家消費を第一の目的として栽培しているが、余剰は、付近のマーケット、または自宅で売り、また交換



図13 第4ゾーン：パノン・タイ村のキャッチメント(Source: Service Geographique d'Etat 1987: D-48-44)

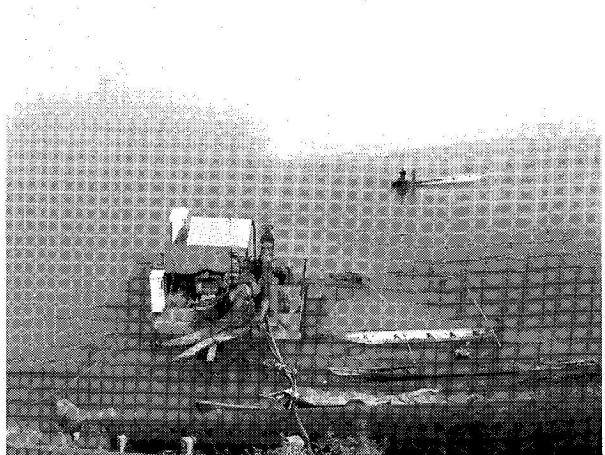


図14 パノン・タイ村の環境：メコン川における揚水と漁労(西村正雄撮影)

している。最近はその船を使って、パクセのマーケットまで持ってゆく農家も出ている。一般的に、パノン・タイでは、農地の面積が狭く、稲作の生産はそれほど高くない。

VI. 分析結果の解釈

以上4村落における資源獲得パターンを見てみると、次のような共通する特徴が見えてくる。

1. チャンパサックの村落では、従来続けてきた自給自足的な、周りの資源を最大限生かしてゆく、生活の仕方が基本となっている。それらの資源獲得領域（キャッチメント）は、2km圏内が最も一般的であるが、最大5km圏は、自前での資源獲得領域として、活動の範囲内にある。しかし、5km圏を超えると、そこに資源があることを認識していても、日常生活の中で獲得することはまれになる。5km圏がチャンパサックの人々の日常的資源獲得行動の限界のように思われる。
2. 獲得される資源は、多くが生計に関連するもので、食材、建材、道具製作のための材料が主となっている。このことは、人々は、そこでの資源を自己の目的のために利用していることを意味している。
3. 一方、5km圏を越えて利用するものは、誰でも利用できるものとの認識をもっている。そこにあるものは特別な資源とし、その利用、保全の主体ははっきりと認識されていない。むしろ、チャンパサックという「共同体」全体のものと考えられている。そのため、誰でもそれにアクセスし、利用することが出来ると考えている。チャンパサックの場合、5km圏外に、カオ山を中心とする山塊を覆う森林地帯が広がり、その利用は特定化されない利用、すなわち共同体の財産としての認識がある。
4. 最後にそうした共同体の財産をまもる霊的な存在を認めており、祖先の霊も含めて多数の霊が森に存在することで、そうした霊の「財産」としての森林地帯の資源を守っていると考えている。結果的に、精霊信仰、儀礼の多くが森林と結びつく。また民話、口頭伝承の題材も森林と結びつく。例えば、火葬場は精霊と今世を生きる境（フォレストライン）におかれ、それが精霊世界と現世との接触の場となっている。そこでの一連の行事は精霊とのコミュニケーションを意味しているように思われる。フォレストラインの認識が重要である。

一方、それぞれの村落がおかれているミクロな環境の違いから、それぞれの村落の住人に行動パターンの違いが見られる。その違いは、上述した資源獲得領域内に何が利用できるかの違いで現れる。それは次のようにまとめられる。

1. 村がどのくらい道路にアクセスしやすいかは、今や資源獲得パターンに大きな影響を及ぼしている。その道路を利用して、5km圏内のマーケットへアクセスすることが出来るかどうか、資源獲得パターンに重要な影響を及ぼしているのである。道路がある場合、多くの村落民は、5km圏内のマーケットに赴く。しかし、その範囲内にマーケットがない場合、むしろ時折、時間を

かけて、パクセといったチャンパサックを遠く離れた、外のマーケットに赴く。

2. その不便さを補う意味で、自前による資源獲得を行い、周り、2km圏の資源に精通する。そして、村人間、他の村人との交換が盛んになる。この交換に、森林地帯の資源、すなわちチャンパサックの人々の共同の資源（森林地帯の資源）へのアクセスが生じてくる。例えば、パノン・タイの人々は5km圏で森林地帯に到達できない。その場合、そうした資源にアクセスしやすい村にいる人々との交換を通して建材などを得ている。
3. また、もっとも地域の生態系をよく反映するものとして、野菜栽培がある。どのような土壌か、水が得やすいかは、それぞれの村落によって異なる。その違いを認識した上で、栽培する野菜の種類と量が異なってくる。この違いの中に、野生の野菜を多く含めるか、栽培した野菜を主体にするか決められてくる。結局、野生の野菜の摂取は、どのくらい野菜の栽培に適した環境にあるのかによって、それぞれの村落で異なってくる。

VII. まとめ

以上の資料分析から、結論として次のようにまとめられる。

1. チャンパサックの資源獲得パターンは、共通して2km圏内で行なわれるのが一般的である。そして5km圏を越えての資源獲得行動はまれである。5km圏がチャンパサックの人々の資源獲得の限界であるように思われる。
2. 5km圏内にどのような資源を持ち、それにどのくらい容易にアクセスできるかどうか、チャンパサックの人々の資源獲得行動に影響を及ぼしている。アクセスできる資源として、近年急速に物資の種類と量が豊富になってきたマーケットがある。マーケットへのアクセスは、道路が必要で、道路からの距離は資源獲得パターンに影響を及ぼしている。
3. 資源へのアクセスのパターンは、今後も引き続き変動してゆくものと思われる。チャンパサック一帯が世界遺産登録されることによって、共同の財産であった森林地帯での資源獲得行動に規制がかかってきた。地方政府は、すでにそこにおける畑作を禁じ、また資源獲得も制限しようとしている。ここから今まで野生の資源を自由に獲得し、それを他の村との交換で生計を営んできた5km圏に森林地帯が入る村々は、むしろ不平等な扱いを受けてくる可能性がある。

今後、資源獲得パターンに関して、チャンパサック地域の人々の長期にわたった変動を見届けるため、精密なマテリアル・センサスを数年ごとに行ない、変動の様子を数量的に、また質的に記録してゆく必要がある。特に植物利用については、世界遺産登録に伴う影響を大きく受けており、更なる綿密な調査が必要であるものと思われる。

参考文献

Abhay, T. N.

- 1959 "Buddhism in Laos". In Berval, R. de ed., *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie. Pp. 257-256.
- Abram, S. and J. Waldren eds.
 - 1998 *Anthropological Perspectives on Local Development*. London: Routledge.
- Appadurai, A.
 - 1996 *Modernity at Large*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Archambault, C.
 - 1959 "The Sacrifice of the Buffalo at Vat Ph'u". In Berval, R. de ed., *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie. Pp. 156-161.
- Barth, M. A.
 - 1902 "Stèle de Vat Phou." *BEFEO*, II, 3, pp. 235-240.
- Berval, R. de ed.
 - 1959 *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie.
- Cucarzi, M, A. Rivolta, and P. Zolese
 - 1992 Preliminary Report on Geoarchaeological Investigation in the Old City. PRAL 1992 Activity Report. (Unpublished.)
- Cucarzi, M. A. and P. Zolese
 - 1997 "An Attempt to Inventory Khmer Monumental Remains Through Geomagnetic Modelling: the Ancient City of Wat Phu." *BEFEO* 1997.
- Cuellar, J. P. de ed.,
 - 1996 *Our Creative Diversity*. Paris: UNESCO.
- Dagens, B.
 - 1988 Preservation of Wat Phu. UNDP/LAO/86/006 Assignment Report Submitted to UNDP and UNESCO. (Unpublished.)
- Dumarçay, J.
 - 1988 Projet Pour La Restauration Du Temple de Vat Phu. Mission Report Submitted to UNDP and UNESCO. (Unpublished.)
- English Heritage
 - 1996 *Hadrian's Wall World Heritage Site: Management Plan*, July 1996.
- Evans, G.
 - 1990 *Lao Peasants under Socialism*. New Haven: Yale University Press.
 - 1996 *The Politics of Ritual and Remembrance*. Chiang Mai (Thailand): Silkworm.
- Evans, G. ed.
 - 1999 *Laos: Culture and Society*. Chiang Mai (Thailand): Silkworm.
- Feilden, B. M. and J. Jokilehto
 - 1993 *Management Guidelines for World Cultural Heritage Site*. Rome: ICCROM.
- Finot, M. L.
 - 1902 "Vat Phou." *BEFEO*, II, 3. Pp. 241-245.
- Flannery, K.
 - 1976 "Empirical Determination of Site Catchments in Oaxaca and Tehuacan." In Flannery, K. ed., *The Early Mesoamerican Village*. New York: Academic Press. Pp. 103-117.
- Flannery, K. ed.
 - 1976 *The Early Mesoamerican Village*. New York: Academic Press.
- Freeman, M.
 - 1996 *A Guide to Khmer Temples in Thailand & Laos*. Bangkok: River Books.
- Geertz, C.

- 1963 *Agricultural Involution*. Berkeley: University of California Press.
- 2000 *Local Knowledge*. Third Edition. Basic Books. (Originally published in 1983).
- Government of Lao PDR and UNESCO
- 2001 *Champasak Heritage Management Plan*. Bangkok: UNESCO.
- Groslier, B. P.
- 1979 "La Cité Hydraulique Angkorienne: Exploitation ou Surexploitation du Sol ?" *BEFEO*, LXVI.
- Harper, J.
- 2003 "Memories of Ancestry in the Forests of Madagascar." In Stewart, P. J. and A. Strathern eds., *Landscape, Memory and History*. London: Pluto Press. Pp. 89-107.
- Harrison, R. ed.
- 1994 *Manual of Heritage Management*. Oxford: Butterworth Heinemann.
- Hirsch, E. and M. O. Hanlon eds.
- 1997 *Anthropology of Landscape*. Oxford: Clarendon Press.
- Holland, D., et al.
- 1998 *Identity and Agency in Cultural Worlds*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- ICCROM
- 1995 Training Strategy in the Conservation of Cultural Heritage Sites. (Unpublished).
- Jacob, J. M.
- 1974 "Pre-Angkor Cambodia: Evidence from the Inscription in Khmer concerning the Common People and their Environment." Smith, R. B. and W. Watson eds., *Early South East Asia*. Oxford: Oxford University Press. Pp.406-426.
- Jacques, C.
- 1962 "Notes sur l'inscription de la stèle de Vat Luong Kau." *Journal Asiatique*, ccl (2), pp. 249-256.
- 1986 "Le Pays Khmer Avant Angkor." *Journal des Savants* 1986.
- 上東 輝夫
- 1990 『ラオスの歴史』。東京：同文館。
- Kottak, C. P.
- 1994 *Anthropology*, 6th ed. New York: McGraw-Hill, Inc.
- Kuribayashi, K.
- 1996 Mission Report. Mission to Lao PDR for Project 536/LAO/70 from 28 August to 19 September 1996. (Unpublished).
- Lefèvre, E.
- 1995 *Travels in Laos*. Bangkok: White Lotus. (Originally published as *Un Voyage au Laos*, Ed. Plon, Nourrit et Cie, Paris in 1898).
- Levy, P.
- 1959a "Two Accounts of Travels in Laos in the 17th Century". In Berval, R. de ed., *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie. Pp. 50-67.
- 1959b "The Sacrifice of the Buffalo and the Forest of the Weather in Vientiane". In Berval, R. de ed., *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie. Pp. 162-173.
- Lintingre, P.
- 1974 "A La Recherche du Sanctuaire Préangkorien de Vat Phou." *Revue Française d'histoire d'outre-mer*, no. 225.
- Marchal, H.
- (出版年不明) *Le Temple de Vat Phou*. Saigon: Imprimerie Nouvelle d'Extreme-Orient-Saigon.
- Ministry of Information and Culture, Lao PDR

1996 Ministerial Decree on the Nomination of the National Inter-Ministerial Co-ordinating Committee for WATPHU. Ministry of Information and Culture Internal Document (N. 330/IC.)

Miura, K. (三浦 恵子)

2004 *Contested Heritage: People of Angkor*. Ph.D thesis (University of London SOAS).

Nishimura, M. (西村 正雄)

1997 Mission Report I for Missions I, II, and III (August-December 1996). UNESCO-Laotian International Project for the Safeguarding of Wat Phu (Lao-UNESCO Wat Phu Project) (536/LAO/70). (Unpublished).

1998a Mission Report I for Mission IV (January-April 1997). UNESCO-Laotian International Project for the Safeguarding of Wat Phu (Lao-UNESCO Wat Phu Project) (536/LAO/70). (Unpublished).

1998b Conceptual Framework for a Strategy of Cultural Resource Management at Archaeological Sites: the Approach Developed at Vat Phu. Paper Presented at the IPPA Congress, Melaka., July 3, 1988.

1998c 『東南アジアの考古学』(共著)。東京：同成社。

2004a Representing "Vat Phou" - An Ethnographic Account of the Nomination Process of Vat Phou and Adjunct Archaeological Sites to the World Heritage List —. 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第49輯・第3分冊。Pp.29-63.

2004b 「ラオス地域人類学研究所活動報告」。COE2004年度報告書。早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター

2004c 「ラオス、チャンバサックのランドスケープと記憶」。「文化人類学年報—特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学—文化遺産・記憶・地域文化—」第1巻(早稲田大学文学部)。Pp.21-30.

2005a 「ラオスとその周辺地域における人類学的研究—ラオス地域人類学研究所の活動と目標」。「文化人類学年報—特集：ラオスとその周辺における遺産・モノ・生活」第2巻。Pp.7-14.

2005b 「チャンバサックの集合的記憶と分有」。「文化人類学年報—特集：ラオスとその周辺における遺産・モノ・生活」第2巻。Pp.15-24.

2006a 「遺産をめぐる様々な意見—チャンバサック世界遺産登録のプロセスと地元住民の周辺化—中心-周辺の関係の再検討にむけて」。「アジア地域文化学の構築」。東京：雄山閣。Pp.283-318.

2006b 「チャンバサックの人々の資源獲得パターン：キャッチメント分析の試み」。COE関連シンポジウム『アジアにおける人類学的調査：ラオスを中心として』発表要旨。

2006c 「「遺産」概念の再検討」。「文化人類学研究」(早稲田大学文化人類学会)第7巻。Pp.1-22.

2007a 序論—ラオス南部の文化的景観と記憶。ラオス地域人類学研究所編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』所収。Pp.1-33.

2007b チャンバサックの文化的景観と記憶。ラオス地域人類学研究所編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』所収。Pp.34-55.

2007c 「遺産と記憶—チャンバサックの世界遺産とその維持管理のために」。ラオス地域人類学研究所編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』所収。Pp.241-265.

Nishimura, M. and P. Sikhaxay

1998 *Capacity Building in Cultural Heritage Management within the Context of Assistance for the Preservation of Wat Phu (536/LAO/70)*. Terminal Report (FIT/536/LAO/70) Submitted to UNESCO.

Novellino, D.

2003 "From Seduction to Miscommunication: the Confession and Presentation of Local Knowledge in 'Participatory Development'". In Pottier, J., et al. eds., *Negotiating Local Knowledge*. London: Pluto Press. Pp. 273-297.

大坪 聖子

2004 「ワット・プー遺跡の現状と課題」。「文化人類学年報—特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学—文化遺産・記憶・地域文化—」第1巻(早稲田大学文学部)。Pp.68-73.

小田島 理絵

- 2004 「稲作、自給自足、家族と親族－ラオ人農民の日常的実践と記憶に関する一考察：1950年代から1975年を中心として」。「文化人類学年報－特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学－文化遺産・記憶・地域文化－」第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.31－43.
- 2005 「チャンパスックの日常生活－ドンタラートの形成と人々の生活およびその変遷－」。「文化人類学年報－特集：ラオスとその周辺における遺産・モノ・生活」。Pp.25－37.
- Parmentier, H.
1914 "Le Temple de Vat Phu." *BEFEO*, XIV, 2.
- Pichard, P.
1997 The Conservation of Vat Phu Temple. Assignment Report Submitted to UNESCO (FIT/536/LAO/70). (Unpublished).
- Preusser, F. D.
1997 Wat Phu, Lao PDR Mission Report, Feb. 2－17, 1997. Project # 536/LAO/70 and 534/LAO/70 Submitted to UNESCO. (Unpublished).
- Ramos, M. J., A. Medeiros, P. Sena and G. Praça
2003 "Managing Natural Resources in Eastern Algarve, Portugal: An Assessment of the Policy Uses of Local Knowledge(s)". In Pottier, J., et al. eds., *Negotiating Local Knowledge*. London: Pluto Press. Pp. 155-170.
- Rawson, P.
1967 *The Art of Southeast Asia*. Singapore: Thames and Hudson.
- Rooney, D.
1994 *Angkor: An Introduction to the Temples*. Bangkok: Asia Books.
- 砂井 紫里
2004 「日常食事と食べ物の記憶」。「文化人類学年報－特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学－文化遺産・記憶・地域文化－」第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.44－53.
- Sayavongkhamdy, T.
1990 Conservation of Historical and Cultural Heritage. Terminal Report Submitted to UNDP/UNESCO. Preservation of Wat Phu Champassak Project (LAO/86/006). (Unpublished).
- Sikhanxay, P.
2004 Lao Government Policy toward Cultural Resource Management. 「文化人類学年報－特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学－文化遺産・記憶・地域文化－」第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.74－80.
- Sisouphanthong, B. and C. Taillard
2000 *Atlas of Laos*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Stewart, P. J. and A. Strathern
2003 "Introduction." In Stewart, P. J. and A. Strathern eds., *Landscape, Memory and History*. London: Pluto Press. Pp. 1-15.
- Stewart, P. J. and A. Strathern eds.
2003 *Landscape, Memory and History*. London: Pluto Press.
- Stuart-Fox, M.
1997 *A History of Laos*. Cambridge: Cambridge University Press.
1998 *Historical Dictionary of Laos. 2nd Edition*. Lanham (UK): The Scarecrow Press.
- Taillard, C.
1987 *Le Laos*. Montpellier: Groupement d'Intérêt Public RECLUS.
- UNESCO
1972 Convention of World Heritage. Paris: UNESCO.
1987 Project Document: Preservation of Wat Phu, Champassak. (LAO/86/006/A/01/13). (Unpublished).
1995 Capacity Building in Cultural Heritage Management within the Context of Assistance for the Preservation

of Wat Phu (Wat Phu ZEMP) (Revised Draft Project Document).

1996a Project Document: Capacity Building in Cultural Heritage Management Within the Context of Assistance for the Preservation of Wat Phu (Wat Phu ZEMP). (Unpublished).

1996b Mission Report to Laos PDR for project 536/LAO/70 (10 June to 19 June 1996). (Unpublished).

1996c Wat Phu ZEMP Project. Interim Report as of 18 November 1996. (Unpublished).

UNESCO/PROP

1996 UNESCO/PROAP Cultural Sector Priority Field Activities in Asia/Pacific 1996-1997. Document Distributed within UNESCO/PROAP. (Unpublished).

UNESCO/UNDP

1991 Preservation of Wat Phu, Champassak: Project Findings and Recommendations. UNDP/LAO/86/006 Terminal Report. (Unpublished).

Vita-Finzi, C., and E. S. Higgs

1970 Prehistoric Economy in the Mt. Carmel Area of Palestine: Site Catchment Analysis. *Proceedings of the Prehistoric Society* 36. Pp. 1-37.

Wolters, O. W.

1974 "Khmer 'Hinduism' in the Seventh Century." In Smith, R. B. and W. Watson eds., *Early South East Asia*. New York: Oxford University Press. Pp.427-442.

Young, C.

1997 The Management of the Wat Phu: Cultural Landscape. Mission Report Submitted to UNESCO. (Unpublished).

Zarky, A.

1976 "Statistical Analysis of Site Catchments at Ocos, Guatemala." In Flannery, K. ed., *The Early Mesoamerican Village*. New York: Academic Press. Pp. 117-130.

注

- (1) 正式英文名称は、Vat Phou and Associated Ancient Settlements within the Champasak Cultural Landscapeである。
- (2) バクセは人口規模で、ラオス第二の都市といわれている。
- (3) リンガは男性を表わすと見られる石棒で、シバ神のシンボルと一般に考えられている。